

少女小説を

知るための100冊

嵯峨景子

少女小説の歴史を
100の名作で辿る
ブックガイド！

嵯峨景子なら間違いない！
少女小説好きに全力で
お薦めする一冊です。

推薦

『流血女神伝』の須賀しのぶ

現在人気のある少女小説、
過ぎし日に読んでいた
懐かしい少女小説の発見にぜひ。

推薦

『本好きの下剋上』の香月美夜

少女小説を知るための100冊

嵯峨景子

星海社

253



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

少女小説と聞いて、あなたはどんな作品を頭に思い浮かべますか？ 吉屋信子の『花物

語』や川端康成の『乙女の港』、あるいはモンゴメリの『赤毛のアン』やオルコットの『若

草物語』を挙げる人もいれば、氷室冴子の『なんて素敵にジャパネスク』や折原みとの『時

の輝き』などの、コバルト文庫やティーンズハート作品を思い出す人もいるでしょう。

少女小説は100年以上に及ぶ長い歴史を持つジャンルで、明治から令和の現在まで形を変えながら書かれ／読まれてきました。吉屋信子『花物語』の登場から、戦後に起きた空前の少女小説ブーム、そしてコバルト文庫やティーンズハートの創刊・隆盛を経て、現在ではライトノベルやライト文芸、ウェブ小説の領域にまでその要素は多彩に広がっています。そんな少女小説の歴史や潮流を辿るために、2022年までの刊行作品から100タイトルを選出して紹介するブックガイドとしてまとめたのが、この『少女小説を知るための100冊』です。国内外の古典的作品から現在の最新作まで100タイトルを選

び、作品の読みどころや歴史的な背景を解説しました。各タイトルには「併読のススメ」という、併せて読みたい作品を紹介するコーナーもあり、両者をあわせると数百作品を取り上げています。

この本では、少女小説を“少女を主たる読者層と想定して執筆された小説”と定義しています。けれども少女小説の読者層は時代と共に変化し、2000年以降は高年齢化が進みました。現在の少女小説のメイン読者はかつてのような女子中高生ではなく、20代以上の大人の女性です。というわけで、近年の少女小説の現状と最初の定義にはすでにズレが生じているのです。

加えて本書では、少女読者を想定した作品や少女小説専門レーベルから刊行された狭義の少女小説に止まらず、^{とど}ケータイ小説や乙女系小説（ティーンズラブ）、男性向けライトノベルやライト文芸、ウェブ小説などの隣接領域も取り上げています。隣接領域の作品を取り上げる場合は、少女小説的な読みどころのある作品を、あるいは少女小説の歴史を知ろうで紹介しておいた方がよいジャンルの作品をという観点からセレクトしました。本書の目的は少女小説の定義を突き詰めることや、狭義の少女小説だけを取り上げることではなく、隣接領域にも目を配りながらその歴史的変遷^{へんせん}や多様な世界を紹介する点にあること

をあらかじめお断りしておきます。

これまでも筆者は、『コバルト文庫で辿る少女小説変遷史』や『大人だって読みたい！少女小説ガイド』などの、少女小説をテーマにした著作を手掛けてきました。『少女小説を知るための100冊』は『大人だって読みたい！少女小説ガイド』と同じ少女小説をテーマにしたブックガイドであるものの、選書や執筆方針に大きな違いがあります。

『少女小説を知るための100冊』では、コバルト文庫創刊以後の少女小説のみならず、明治期から1970年代までの作品にも光を当てました。近代まで遡ることで、より多様な少女小説の世界と歴史を紹介しています。またガイド部分では、作品の魅力や読みどころを解説しながら、ジャンルにまつわる歴史的背景にも言及するよう心がけました。歴史的な経緯は個別の作品紹介でも触れていますが、ポイントをまとめて読めるよう少女小説史をコンパクトに解説したコラムも入れています。

さらに、本書では海外少女小説の紹介にも力を入れました。この本では『小公女』や『赤毛のアン』のような古典的名作から、『おちゃめなふたご』のような1980年代に入ってから初めて翻訳された作品、1990年に氷室冴子の企画で刊行された角川文庫マイディアストリー、『少女探偵ナンシー・ドルー』や『エノラ・ホームズの事件簿』のような

ミステリーまで幅広いラインナップを取り揃えています。

少女小説を取り上げた解説本やムック・研究書は、近代日本の少女小説／海外の翻訳少女小説／コバルト文庫以降の少女小説、のいずれかにテーマを絞って執筆されているケースが多いです。けれども『少女小説を知るための100冊』は、新書という手に取りやすいフォーマットの中で、すべてを横断することを目指しました。この一冊で各ジャンルの人気作や主要作をおさえることができて、読書欲をくすぐるブックガイドとしての役目を果たしながら、その歴史的背景も解説する。そんな欲張りな本なのです。

すでに述べたように、少女小説は長い歴史をもち、またベストセラーとして多くの読者に読まれてきた作品も数多くあります。しかしながら、若い女性読者を中心に支えられてきた少女小説は、文芸批評あるいは若者文化に関する議論などにおいて大きく取り上げられる機会は乏しく、いわば周縁的な位置に置かれて軽んじられてきたことは否めません。今回、新書というかたちを通じて様々な作品を紹介することで、強い支持を得ながら歩んできた少女小説の広がりや変遷について多くの人に知っていただき、文芸の一ジャンルとして認識していただく契機になればと期待を込めて本書を著しました。

それでは、多彩で奥深い少女小説の世界をご案内しましょう。

目次

はじめに 3

Section / 草創期〜1970年代

- 01 フランシス・ホジソン・バーネット『小公女』 14
- 02 ルイーザ・メイ・オルコット『若草物語』 16
- 03 伊澤みゆき「闇に居て」 18
- 04 吉屋信子『花物語』 20
- 05 水守亀之助『涙の握手』 22
- 06 吉川英治『ひよどり草紙』 24
- 07 横山美智子『嵐の小夜曲』^{セレナーデ} 26
- 08 由利聖子『モダン小公女』 28
- 09 川端康成『乙女の港』 30
- 10 森田たま『石狩少女』^{をとめ} 32
- 11 大林清『母恋ちどり』 34
- 12 三谷晴美(瀬戸内寂聴)『青い花』 36
- 13 ルーシー・モード・モンゴメリ『赤毛のアン』 38

- 14 西條八十『人食いバラ』 40
- 15 キャロリン・キーン〈少女探偵ナンシー・ドルー〉
『古時計の秘密』 42
- 16 高谷玲子『静かに自習せよーマリコー』 44
- 17 佐伯千秋『潮風を待つ少女』 46
- 18 富島健夫『制服の胸のここには』 48
- 19 ローラ・インガルス・ワイルダー〈大草原の小さな家〉
『大きな森の小さな家』 50
- 20 佐々木丸美『崖の館』 52

Column
日本の少女小説史 1 草創期〜1970年代 54

Section 2 1970年代末〜1980年代

- 21 若桜木度 (監修〓西崎義展)
『さらば宇宙戦艦ヤマト 愛の戦士たち』 62
- 22 編〓風見潤
『たんぽぽ娘 海外ロマンチックSF傑作選2』 64
- 23 氷室冴子 〈クララ白書〉 66
- 24 新井素子 〈星へ行く船〉 68
- 25 イーニッド・ブライトン 〈おちやめなふたご〉 70
- 26 久美沙織 〈丘の家のミッキー〉 72
- 27 藤本ひとみ 〈まんが家マリナ〉
(『愛からはじまるサスペンス』 74)
- 28 花井愛子 『一週間のオリーブ』 76
- 29 林葉直子 〈とんでもポリス〉
(『とんでもポリスは恋泥棒』 78)

- 30 日向章一郎 〈放課後〉
(『放課後のトム・ソーヤー』 80)
- 31 風見潤 〈幽霊事件〉 (『清里幽霊事件』 82)
- 32 津原やすみ 〈あたしのエイリアン〉
(『星からきたボーイフレンド』 84)
- 33 前田珠子 〈破妖の剣〉 (『漆黒の魔性』 86)
- 34 若木未生 〈ハイスクール・オーラバスター〉
(『天使はうまく踊れない』 88)

Column
日本の少女小説史 2 1970年代末〜1980年代 90

Section 3 1990年代

- 35 北原なおみ〈ホームズ君は恋探偵〉 98
 36 桑原水菜〈炎の蜃気楼〉 100
 37 折原みと『時の輝き』 102
 38 ジーン・ポーター『リンバロストの乙女』 104
 39 森奈津子〈お嬢さま〉
 『お嬢さまとお呼び!』 106
 40 山本文緒『ラブリーをつかまえろ』
 (改題『チェリーブラッサム』) 108
 41 小沢淳〈Tales From Third Moon〉
 『金と銀の旅ムーン・ファイアー・ストーン1』 110
 42 瀬川貴次〈闇に歌え!〉 112
 43 小野不由美〈十二国記〉(『月の影影の海』) 114
 44 花衣沙久羅〈少年たちのハイパーロマン〉
 (『戒-KAII』) 116
 45 ひかわ玲子〈女戦士エフェラ&ジリオラ〉 118
 46 小林深雪『キッチンへおいでよ!』 120

- 47 霜島ケイ〈封殺鬼〉(『鬼族狩り』) 122
 48 あさぎりタ〈泉&由鷹〉(『僕達の始まり』) 124
 49 飯田雪子
 『忘れないうで - FORGET ME NOT -』 126
 50 樹川さとみ〈楽園の魔女たち〉 128
 51 朝香祥〈旋風は江を駆ける〉 130
 52 榎野道流〈奇談〉(『人買奇談』) 132
 53 荻原規子〈西の善き魔女〉 134
 54 リンダ・ハワード『マッケンジーの山』 136
 55 今野緒雪〈マリア様がみてる〉 138
 56 駒崎優〈足のない獅子〉 140
 57 須賀しのぶ〈流血女神伝〉(『帝国の娘』) 142
 58 津守時生〈三千世界の鴉を殺し〉 144

Section 7 2000年代

- no. 59 喬林知〈まるマ〉(『今日から㊦のつく自由業!』) 154
 no. 60 Yoshi〈Deep Love〉 156
 no. 61 令丈ヒロ子〈若おかみは小学生!〉 158
 no. 62 雪乃紗衣〈彩雲国物語〉 160
 no. 63 谷瑞恵〈伯爵と妖精〉 162
 no. 64 桜庭一樹『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない
 A Lolypop or A Bullet』 164
 no. 65 高岡ミズミ〈VIP〉 166
 no. 66 紅玉いづき『ミニズクと夜の王』 168
 no. 67 清家未森〈身代わり伯爵〉

Section 5 2010年代〜2020年代

- no. 73 嬉野君〈金星特急〉 190
 no. 74 三川みりへシユガーアップル・フェアリーテイル
 (『銀砂糖師と黒の妖精』) 192
 no. 75 三上延〈ビブリア古書堂の事件手帖〉 194

- (『身代わり伯爵の冒険』) 170
 no. 68 梨沙〈華鬼〉 172
 no. 69 小野上明夜〈死神姫の再婚〉 174
 no. 70 ナンシー・スプリンガー
 〈エノーラ・ホームズの事件簿〉 176
 no. 71 深山くのえ〈桜嵐恋絵巻〉 178
 no. 72 仁賀奈〈ウエディング・オークション〉 180
 Column
 日本の少女小説史 4 2000年代 182

- no. 76 タ鷲かのう〈(仮)花嫁のやんごとなき事情〉 196
 no. 77 葵木あんね
 『緋色の聖女に接吻を 白き翼の悪魔』 198
 no. 78 喜多みどり〈デ・コスタ家の優雅な獣〉 200

- 79 日向夏〈葉屋のひとりごと〉 202
- 80 貴嶋啓〈エルトゥールル帝国〉『囚われの歌姫』 204
- 81 原案＝HoneyWorks〈告白予行練習〉 206
- 82 朝霧カフカ〈文豪ストレイドッグス〉 208
- 83 香月美夜〈本好きの下剋上〉 210
- 84 友麻碧〈かくりよの宿飯〉 212
- 85 山口悟〈乙女ゲームの破滅フラグしかない悪役令嬢に転生してしまった…〉 214
- 86 辻村七子〈宝石商リチャード氏の謎鑑定〉 216
- 87 青木祐子〈これは経費で落ちません！ 経理部の森若さん〉 218
- 88 由唯〈虫かぶり姫〉 220
- 89 古宮九時〈Babel〉 222
- 90 ぷにちゃん
- 91 石田リンネ〈茉莉花官吏伝〉 226
- 〈悪役令嬢は隣国の王太子に溺愛される〉 224

- 92 永瀬さらさ
- 93 〈悪役令嬢なのでラスボスを飼ってみました〉 228
- 93 白川紺子〈後宮の烏〉 230
- 94 顎木あくみ〈わたしの幸せな結婚〉 232
- 95 山田桐子〈引きこもり令嬢は話のわかる聖獣番〉 234
- 96 宮野美嘉〈蟲愛づる姫君〉 236
- 97 恵ノ島すず〈ツンデレ悪役令嬢リーゼロッテと実況の遠藤くんと解説の小林さん〉 238
- 98 クレハ〈鬼の花嫁〉 240
- 99 ひずき優
- 100 〈乙女ふたり王女と聖女の宮廷戦記〉 242
- 春奈恵〈作家令嬢と書庫の姫〉 244
- 『作家令嬢は舞踏会でロマンスを綴る』 244
- Column
日本の少女小説史 5 2010年代から現在まで 246

*目次と作品紹介ページでは、左記のように表記しております。

『』……書名

へ　　ゝ……シリーズ名

*書誌情報は、2022年12月時点で公開されたものに基づきます。

Section



草創期～
1970年代

フランシス・ホジソン・バーネット

『小公女』

寄宿学校もののルーツ的作品

あらすじ 裕福なクルー大尉の娘セーラは、インドからロンドンに渡り、ミンチン上流女子寄宿学校に転入する。彼女は特別待遇を受け、贅沢な持ち物に囲まれた暮らしはまるでお姫さまのようだった。だがその境遇に驕ることはなく、聡明でお話上手なセーラは他の生徒たちから慕われている。ある時、クルー大尉がインドで急死し破産したとの知らせが届く。大人びて風変わりなセーラを内心では嫌っていたミンチン女史は、彼女を寒い屋根裏部屋に押し込め、下働きとして劣悪な環境でこき使う。誇り高いセーラは持ち前の空想力とプリンセスの気位で辛い境遇に耐え、やがて奇跡が起きた。



刊行年(原著) = 1905年

初邦訳 = 1893年～(若松賤子訳「セイラ、クルーの話。」の題の加筆前版)

書影 = 光文社古典新訳文庫版

併読のススメ 少女小説と親和性の高い古典的翻訳小説といえ、ウェブスターの『あしながおじさん』が思い浮かぶ。孤児院育ちの少女ジュディは文才を認められ、正体を隠した裕福な紳士から奨学金を受けて大学に進学することになった。唯一の条件が、毎月手紙を送ること。

ガイド

『小公女』はバーネットが1887年に「セーラ・クルー」の題で発表したのち、1905年に加筆・発行した小説。日本では明治時代に初邦訳され、以後さまざまなバージョンが刊行されるなど、児童文学の定番として広く読まれてきた作品である。インドで生まれたお金持ちの少女セーラが、ロンドンにある上流女子寄宿学校に入学し、お姫さまのような暮らしから一転、無一文の孤児になるもその後は逆転劇でハッピーエンドを迎える。波乱万丈なストーリーに加え、屋根裏部屋で暮らす自分を牢獄に繋がれたマリー・アントワネットの姿と重ねるなど、どんなに辛い目に遭ってもプリンセスとしての矜持を失わないセーラの誇り高い姿は強いインパクトを残す。

少女小説的な視点から注目すれば、本作は寄宿学校ものや女子校もののルーツ的作品として位置づけることができるだろう。セーラを取り巻くバラエティに富んだ友人たちとの交流が細やかに描きこまれ、そこに意地悪をするライバルキャラや、ヒールのポジションの教師なども絡んでいく。クラシッくな学園小説としての読みどころが多く、また夜の屋根裏部屋でセーラが仲間と共にお茶会を開こうとする場面などは、こののちに登場する寄宿学校ものでも引き継がれている要素といえるだろう。『小公女』の直接的な影響を受けた作品としては、ロンドンからインドに渡った少女シャーロットがオルガ女学院の寄宿舎に入舎するという、高殿円の〈ヘカリー〉が挙げられる。『小公女』の設定を換骨奪胎した、心ときめく冒険譚だ。

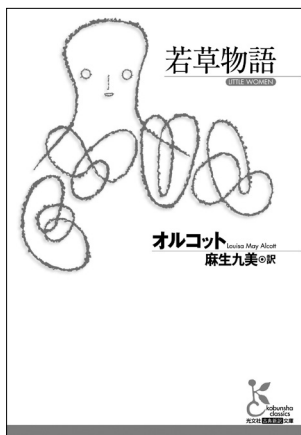
ジュディは匿名の紳士を「あしながおじさん」と呼び、日々の生活を綴った手紙を頻繁に送るが……。大学生活を事細かに報告する手紙から溢れ出す、ジュディのユーモアと好奇心がまぶしい名作だ。コバルト文庫から出ている我鳥彩子の〈チョコレート・ダンディ〉は、金と身分が目当ての女に絶望している公爵のオスカーが、賭けのために小説家志望の孤児アデルを匿名で支援するという「あしながおじさん」を下敷きにした作品。また、一迅社文庫アイリスの創刊ラインナップだった志麻友紀『バステルと空飛ぶキャンディ』は、『あしながおじさん』の設定に百合風味が加わった寄宿学園小説である。

ルイーザ・メイ・オルコット

『若草物語』
わかくさものがたり

個性豊かなマーチ家四姉妹を描く不朽の名作

あらすじ 南北戦争時代のニューイングランド。貧しくも温かなマーチ家では、父親が従軍牧師として戦地へ赴き、愛情深い母親と個性豊かな四人の娘たちが家を守っていた。長女のメグは美人でしっかり者だが虚栄心があつて贅沢に憧れ、男の子のように生きたいと望む快活な次女のジョーは本の虫で作家になることを夢見ている。三女のベスは優しい心の持ち主だが重度の引っ込み思案、おしゃまで気取り屋な末っ子のエイミーは絵が得意。姉妹は隣家で暮らす裕福なローレンス氏や、その孫で音楽好きな少年ローリーと親交を結び、様々な出来事を通じて少女から大人へと近づいていく。



刊行年(原著) = 1868年
 初邦訳 = 1906年～(北田秋園訳『小婦人』)
 シリーズ巻数 = 全1作 + 続編3作
 書影 = 光文社古典新訳文庫版

併読のススメ 『若草物語』の4年後に発表されたスーザン・クーリッジの『すてきなケティ』は、おてんばでそっかしい長女ケティを主人公にした、カー家姉弟の物語。医者のカイ博士は早くに妻を亡くし、12歳の長女ケティを筆頭に六人の子どもたちが残された。長女のケティ

『若草物語』(原題は『Little Women』)は、アメリカの作家ルーザー・メイ・オルコットが1868年に上梓した自伝的小説。マーチ家四姉妹の日常を丁寧かついきいきと描いた物語は好評を博し、出版から150年以上の時を経た今も世界中で高い人気を誇る。日本では1906年に北田秋圃が『小婦人』というタイトルで初邦訳し、以後さまざまなバージョンが発売された。現在定着している『若草物語』の名称は、1934年に日本で公開されたキャサリン・ヘプバーン主演の映画で使われており、日本語監修を務めた吉屋信子がこのキャッチーなタイトルを考案したのではないかとはいわれている。

『若草物語』はフェミニズム小説の嚆矢ともいわれ、とりわけ女らしさというジェンダー規範への反逆者であり、職業作家としての自立を目指すジョーの姿は、これまで多くの女性たちの心を刺激してきた。父親不在のマーチ家で男役を自認し、結婚することを望まず、様々な挫折を繰り返しながらも自らの道を切り開こうと格闘するジョーの姿は、現代の私たちが自己投影できる先進的なヒロインである。2020年には『ストーリー・オブ・マイライフ／わたしの若草物語』という、『若草物語』と『続若草物語』をベースにした新しい映画も制作された。明治維新の年に刊行されたこの現代的な物語は、これからも女性たちの心を照らし続けることだろう。

は本来であれば母親的役割を担う立場だが、彼女はガキ大将のような性格で、気が合わない妹に意地悪をしたり、様々な騒動を巻き起こしたりしてはイジローばさんに叱られている。ある時ケティはブランコの事故で一時的に下半身不随となり、これをきっかけに精神的な成長をみせるのだった。後半はやや教訓色が強まるが、やんちゃで暴れ馬なケティの奔放な姿は魅力に溢れている。女子校に入学したケティの賑やかな寄宿舎生活を描く『すてきなケティの寮生活』や、イギリスやフランスを旅する観光要素の中にケティのロマンスを織り込んだ『すてきなケティのすてきな旅行』など、続編も併せて読みたい。

伊澤みゆき

「闇に居て」

吉屋信子が憧れた闇の百合小説の書き手

あらすじ 大人たちの言動から、7歳の幼さで自分が醜く生まれたことを悟った筆子。心に消えない傷を負い、劣等感をこじらせていった筆子は、醜さゆえに自分は愛されないと思い込んで世界のすべてを呪っている。女学生になった筆子は松野ひな子という、たくさんの賛美者に囲まれている美しい少女を一方的に慕うようになった。だが彼女の眼中に入らない筆子は、ひな子にいつそ死んでもらいたいと願い始める。そうすれば彼女はすぐに世間から忘れられて、自分のものになってくれるのだと……。ほどなくしてひな子は病を得るが、筆子は歪んだ執着を貫き続けた。



初出＝『少女画報』

掲載年＝1914年

画像＝『少女画報』掲載の「闇に居て」挿絵

併読のススメ この機会に他の伊澤みゆき作品も紹介したい。「美智さま参る」は、肺を病んで女学校を離れた薫の物語。薫は親しい友人の美智さまを想うことで辛い療養期間を過ごしたが、久しぶりに会いに出かけると美智さまは自分ではない別の少女を抱きしめている。「わたしは別

ガイド

伊澤みゆき（1890～1973年）は、1912年から1916年まで雑誌『少女画報』で活躍し、60作近い少女小説を発表した作家である。生前に著書が発売されなかったため、その名と作品は長らく埋もれていたが、近年は少女小説の文脈から注目が高まりつつある。少女友愛物語の中に濃密な同性思慕^{しほ}を織り込み、少女の屈折した自意識や強烈な執着をあぶり出した作品は、100年以上の時を経た今でも新鮮な衝撃を与える。伊澤みゆきは吉屋信子が憧れた作家として知られ、後年吉屋はインタビュの中で伊澤になるつもりで『花物語』の第一話を『少女画報』に投稿したと明かしている。

伊澤みゆきは当時の模範的な少女像や少女規範からはみ出すような、苛烈^{かれつ}な自我を抱えた少女の姿を描き続けた。中でも代表作の「闇に居て」の主人公筆子の造形は強いインパクトをもたらず。ルッキズムの問題に百合を掛け合わせたテーマ設定も鋭く、その先見性に驚かされる。物語の結末も、通常の少女小説であれば己の心を反省するという教訓的展開^{たど}を辿るだろう。だが本作は「ひな子さん。あなたが死になすったらあたしも死にます。死んだら美しくなれましょうもの」筆子は力強く呟きました。——闇に居て」という一文で結ばれるのだ。国書刊行会から『いっそあの方が死んで下すったなら伊澤みゆき作品集』の発売が予定されているので、刊行を楽しみに待ちたい。

れたくない。こいしいあなたに別れたくない。こう叫びつつわたしは寂しい浜へかえります。泣きながらかえります。いつまでもあなたを偲びたいため。終りの日まであなたをこいしのんでいたいために、あなたも泣いて下さいますか。ああ。あなたも——」という罵の、まるで恋人に向けたような叫びが痛切だ。他にも、女王のような貞子^{さだこ}によって姉役にされた主人公が、憎しみや葛藤^{かつどう}を吐露しながら別れを選択する「春も逝く」や、想いを寄せる下級生に気持ち伝えられない心の弱いかな子^{かなこ}と、そんなかな子の気持ちを知ら抜いたうえで支配しようとする上級生のみどりを描いた「木犀句う頃」なども印象的だ。

吉屋信子
よしやのぶこ『花物語』
はなものがたり

時を超えて読み継がれる少女小説のバイブル

あらすじ 初夏のゆうべ。七人の少女が洋館の一室に集い、懐かしい物語を語りあっていた。「鈴蘭」の語り手は、ミッシェン・スクール出身の笹島ふさ子。彼女が披露したのは、幼い頃に女学校の音楽教師だった母と共に体験した、夜の講堂に響く謎のピアノ音と、伊太利の少女をめぐるあわれ深いエピソードだった。続いて「月見草」「白萩」「野菊」「山茶花」「水仙」「名も無き花」と語り手を変えながら、女性同士のほかない邂逅や切ない別れ、美しい同性への思慕などが紡がれていく。少女たちは話に聞き入り、吐息をつきながら憧れに潤んだ黒い瞳を見交わすのだった……。



初刊＝洛陽堂
刊行年＝1920年
書影＝河出文庫版

併読のススメ 『花物語』の系譜の吉屋作品としては、『少女の友』掲載の『わすれなぐさ』と『紅雀』をお薦めしたい。性格の異なる三人の少女の三角関係的な友愛や、女学生文化やモダンな都市風俗の描写が魅力的な『わすれなぐさ』は、家庭における男尊女卑に対する少女側

ガイド

吉屋信子の出世作であり、少女小説の代名詞として知られる『花物語』。雑誌『少女画報』に投稿した「鈴蘭」^{すずらん}が編集者の目に留まり、1916年から連載が始まった『花物語』は、読者の支持を受けて以後も書き続けられていく。最初の単行本となった1920年の洛陽堂版から現在に至るまで、『花物語』は様々な版元から刊行されている。とりわけ雑誌『少女の友』を刊行する実業之日本社が中原淳一^{なかはらしゅんいち}の挿絵で1939年に発売したバージョンは、作品のイメージを決定づける役割を果たし、多くの少女を魅了した。

独特のセンチメンタリズムや悲哀に満ちたストーリーは『花物語』の読みどころではあるが、本作はそれだけに止まらず^{とど}、現代に通じる問題提起が描かれている。同時代の少女小説が良妻賢母主義に基づく婦徳的な少女像を描く中で、性的な関係まではめかされる女性同士の恋愛や、家父長制を体现した威圧的な男性への反発、部落差別にもひるまず他者を救おうとする少女の姿などに、吉屋の先進性を見出せる。吉屋は1919年に『地の果まで』で『大阪朝日新聞』の懸賞小説に当選し、以後は大衆小説と少女小説の両ジャンルでヒットメーカーとして活躍した。『少女俱樂部』と『少女の友』という二大少女雑誌を中心に発表された少女小説にも良作が多く、『花物語』以外の作品にもぜひ挑戦してほしい。

の不満にも切り込むフェミニズム小説という一面も持つ。『紅雀』は恵まれない境遇にありながらも誇りを失わない、勝気な少女・まゆみを主人公にしたシンデレラストーリー。自尊心が高すぎるがゆえに素直になれないまゆみの心の成長や、男爵家の跡取りである珠彦とのロマンスが読みどころで、まゆみの凛々しい乗馬服姿は多くの読者を魅了した。講談社の『少女俱樂部』作品では、『あの道この道』が人気を博した。生後まもなく取り替えられて貧しい漁師の子として健気^{けなげ}に育ったお嬢さまと、裕福な家庭でわがままに育った漁師の子の数奇な運命を波乱万丈に描いた物語は、『乳姉妹』や『冬の輪舞』というタイトルでドラマ化もされている。

水守亀之助
なみだ　あくしゅ

『涙の握手』

フェミニンな少年主人公もののロングセラー

あらすじ インドの貧しい商人の息子チガープは、賢くて愛らしい少年だった。彼の両親はとある国の王と王妃であったが戦に敗れて玉座を失い、今は敵国で果物や花を売る商人に身をやつしながら暮らしている。ある時チガープは、父の宿敵である国王ブラフマダッタの庭園に迷い込み、王女のサンターと出会う。チガープの美貌と巧みな笛の腕前を気に入った王女は、以後も彼を花売りとして王城に招き、二人は交流を重ねていった。だが、ブラフマダッタ側に寝返ったパンズ將軍が、チガープの正体に気づく。やがて両親は捕らえられ、チガープの身にも危険が迫るが……。

涙の握手



水守 亀之助

併読のススメ 講談社の作品で男女の恋愛がモチーフとなった少女小説として、人気叙情画家・加藤まさをの『消えゆく虹』（1929年刊行、のち国書刊行会より復刊）を紹介したい。『消えゆく虹』は当時の少女読み物としては濃厚な異性愛が描かれているが、こうした内容を展開できた

初刊＝大日本雄弁会講談社

刊行年＝1925年

書影＝ポプラ社版

ガイド

『涙の握手』は1923年から『少女倶楽部』に連載された小説。インドを舞台にしたエキゾチックな恋と復讐の物語は、高畠 華宵による美麗なイラストも相まって連載時から人気を博し、1925年の書籍化後も版を重ねたロングセラー作品である。戦後はポプラ社から復刊され、また三一書房の『少年小説大系第14巻』にも収録されている。

講談社の創業者である野間清治は『少女倶楽部』の創刊にあたり、「幼き恋愛を扱えるものは、薄紗を隔ててほかに花を観るごとき気品高きものたるを要す」とその方針を明示した。『少女倶楽部』は他の少女雑誌よりも異性愛描写に対して積極的な姿勢を見せており、その方針はチガープとサンターが互いに惹かれ合う様を描いた『涙の握手』からもうかがえる。また『涙の握手』の最大の特徴といえるのは、フェミニンな男性主人公と勇ましい女性キャラクターの設定だ。美貌や笛の腕前が特徴で、たびたび涙を流すチガープは当時の模範的な男らしさとはほど遠く、逆に王女のサンターや彼女の侍女シーターは知力と行動力に溢れている。とりわけシーターは、物語最大の悪役であるパンズ將軍を刺殺する活躍をみせる。本作は少女小説の文脈ではほとんど言及されることがなかったが、異性愛をテーマにしたストーリーや、当時のジェンダー規範を攪乱するようなキャラクター造形などから改めて注目したい作品である。

のも書き下ろし作品だからこそかもしれない。サーカス一座に身を置く澄三と鞠子は、幼い頃から互いを慕い合っていた。ある時、澄三は強欲な座長が恐ろしい計画を立てていることを知る。鞠子は実は資産家の令嬢で、座長は彼女を殺して自分の娘君江を身代わりにしようと企んでいた。鞠子愛する澄三は彼女を救おうとサーカス一座と争いを繰り広げ、澄三に片思いする君江は父を裏切って二人を助けようとするが……。澄三と鞠子と君江の三角関係を描いた恋愛描写や、澄三の自死に終わる悲劇的で救いのない結末を含め、当時の少女小説としては大人びた作風に仕上がっている。

吉川英治 よしかわえいじ『ひよどり草紙』 ぞうし

『少女倶楽部』発の国民的人気作品

あらすじ 時は慶長18年。徳川家康の病氣全快を祝い、朝廷から孫の竹千代（家光）に世にも珍しい紅ひよどりが下賜されることになった。寛太学頭と玉水甚左衛門はひよどりを江戸城まで運ぶ使者に選ばれるが、丹波守とその甥・為永陣太郎の奸計により、ひよどりが逃げてしまう。二人は責任を取って切腹しようとするが、思いがけない命令が下された。二人の子どもの寛燿之助と玉水早苗がひよどりを捕まえて持ち帰れば父の罪は許されるが、救われる命はひとつだけ。幼馴染で仲の良い燿之助と早苗は父の命と家名を賭けた敵同士となり、命がけでひよどりを捜し出そうとするが――。



初刊＝大日本雄弁会講談社
刊行年＝1927年
書影＝吉川英治文庫版

併読のススメ 吉川英治は『少女の友』でも『胡蝶陣』や『やまどり文庫』などの時代小説を手掛けている。1937年から38年にかけて連載された『やまどり文庫』は、『古今和歌集』下の巻（山鳥の巻）をめぐる昭和に書かれたビブリオ小説だ。正直屑屋とあだ名される勢六は御文

ガイド

『ひよどり草紙』は1926年から1927年まで『少女倶楽部』に連載された小説。講談社を創業した野間清治は、女子であっても任侠や武勇に共感するはずだという編集方針を掲げ、『少女倶楽部』には他の少女雑誌では少ない講談小説や時代小説も多く掲載された。『少年倶楽部』連載の『神州天馬俠』で全国の少年を熱狂させた吉川英治の初少女雑誌作品『ひよどり草紙』は、少女のみならず老若男女から人気を博し、その後四度にわたり映画化されている。少女雑誌の時代小説はリアルタイムで支持を受けても、後年言及される機会は少ない。そんな中で歴史小説家の永井路子は『ひよどり草紙』や『月笛日笛』の熱心な愛読者で、小学校一年から五年まで『少女倶楽部』の忠実な愛読者だったと、吉川作品に夢中になった少女時代の思い出を語っており、その言葉からも当時の熱狂ぶりが伝わってくる。

思いがけない形で仇・同士となった燿之助と早苗の数奇な運命や、徳川・豊臣をめぐる陰謀を描いた『ひよどり草紙』は、豊臣側の間者で卑劣な陣太郎、陣太郎に姉を殺されて復讐を誓う少年麻吉など、敵味方共に個性の際立ったキャラが入り乱れて物語が展開する。早苗は戦うヒロインではないが洞察力に優れた聡明な少女で、甘言を弄して近づいてきた陣太郎の本性を真っ先に見抜き、求婚もきっぱりとはねのける。魅力的な少女キャラが活躍する極上のエンターテインメント小説だ。

庫奉行の近江典城から屑を譲り受けたが、その中に貴重な紀貫之の直筆本である『古今和歌集』山鳥の巻が紛れ込んでいた。その価値に気づいた近所の浪人熊木為彦は本を奪って逃走し、勢六と典城も殺害する。勢六の娘の環と典城の息子鏡太郎は本を取り戻すために為彦を追い、そこに盗賊一味のさそり組なども加わって本の争奪戦が繰り広げられていく。男性キャラのみならず、気が強く行動的な環も活躍をみせる時代小説だ。なお『少女の友』の黄金時代を築いた編集長（主筆）の内山基は、時代小説には少女に相応しいものが少ないというスタンスをとり、彼の代にはほとんど掲載されなくなった。

横山美智子
よこやまみちこ

『嵐の小夜曲』
あらし セレナーデ

『少女の友』連載の『少女倶楽部』型小説

あらすじ 医者^いの娘^{むすめ}でつましい暮らしをおくる和泉小夜子^{いずみよここ}と、裕福な旅館の娘の丘陽子^{おかよう}は、家が隣に並ぶ親友同士。ある時、栄玉^{えいぎよく}という少女を連れた旅芸人の男の不始末で火事が起き、小夜子も陽子も家を失ってしまう。小夜子の父は保険金目的の放火を疑われたのち急死、困窮^{こんきゅう}した一家は東京に移った。彼を疑った陽子の父は心を入れ替えて孤児院運営を始め、栄玉を引き取るものの、金銭的に行き詰まっていく。東京で苦勞を重ねる小夜子は、バイオリン教師の小郡綾子^{おこおりあやこ}に音楽の才能を見出されてチャンスを掴む^{つか}。その綾子は幼い頃に行方不明となった娘の行方を今も捜し続けていた……。



初刊＝大日本雄弁会講談社
刊行年＝1930年
書影＝妙義出版社版

併読のススメ 『少女倶楽部』型の少女小説の系譜を受け継いだヒット作であり、1938年から39年まで連載されて人気を博したのが菊池寛の『心の王冠』だ。女学校3年生の真室町子は美しく成績も学年トップの生徒だが、父が病に倒れたため一家は貧しく、町一番の資産家であ

『嵐の小夜曲』^{セレーナーデ}は1929年から30年にかけて『少女の友』に連載されたが、実業之日本社ではなくライバル雑誌『少女倶楽部』を発行する講談社から書籍化された作品だ。小夜子と陽子、小夜子の兄で家族思いの苦勞人の雄一^{ゆういち}、健気な栄玉^{けなげ}など、高潔な心を失わずに幾多の苦難を乗り越えていく少年少女の姿を描いた本作は、忍耐・努力や親孝行を推奨する『少女倶楽部』の理念を体现した小説といえる。人気抒情画家^{じやしやう}の加藤まさを^{かとう}の装丁・挿絵で刊行された単行本は好評を博し、版を重ねていった。『嵐の小夜曲』^{セレーナーデ}は『少女倶楽部』型小説の方向性を決定づけ、以後も加藤武雄^{かとうたけお}の『海に立つ虹』や佐藤紅緑^{さとうこうろく}の『夾竹桃の花咲けば』などのヒット作が続く。叙情的かつ都会的なセンスに溢れた少女小説に注目が集まりがちであるが、同時代の受容を振り返ると、『嵐の小夜曲』^{セレーナーデ}型の作品が大衆的な人気を得ていたのである。

横山美智子は黒田道夫^{くろだ みちお}などの名義で少年小説でも活躍し、『級の光』^{クラス}などの著作もある。尾崎秀樹^{おさき ほうき}の『夢をつむぐ 大衆児童文化のパイオニア』(光村図書)収録のインタビューでは、『少女の友』編集者の東草水^{ひがし そうすい}にお世話になった話と共に、東に出した手紙が東名義で『少女の友』に勝手に発表されたことや、代作を書くよう強いられたことも語られている。当時の少女雑誌編集部が作家を軽んじるような振る舞いをしていて、たことをうかがわせる、時代的証言ともいえるよう。

る遠山家の援助を受けて生活している。町子と同級生の遠山家の娘・典子^{のりこ}は、彼女を女中扱いしたうえで、陰湿かつ執拗^{しつよう}にじめていた。担任の村田先生は町子を気にかけているが、典子の横暴を止めることはできない。ある時学校に、侯爵^{こうしやく}の血をひく美年子^{みねこ}姫が入学する。彼女は町子を気に入り、二人は友情を築くが、それが典子を逆上させて嫌がらせが加速した。典子の徹底したヒールぶりと、健気な町子の対比が鮮やかで、ドラマチックな展開が読者を飽きさせない。典子に救済をもたらす結末はやや物足りなく感じるが、美しく豊かな心が人々を感化するという教訓を描くためには必要な展開なのだろう。

ゆりせいこ
由利聖子

『モダン小公女』

とびきりポップでユーモラスな少女小説！

あらすじ サア坊こと利根サツキは幼い頃に両親を亡くし、母の兄である「パパのおじさん」と貧しいながらも楽しく暮らしていた。ところがある日、学校に前A党総裁・田原是高の執事が現れ、サア坊は豪邸に連れていかれる。田原の一人息子だったサア坊の父は、舞台女優だった母との結婚を機に実家との縁を絶っていた。年老いた祖父は唯一の血縁であるサア坊を見つけ出し、彼女の幸せを願う伯父は姿を消す。境遇が一変したサア坊は女学校の自由学院に編入して、愉快な仲間と共に楽しく賑やかな学生生活をおくる。だが彼女は突然別れた伯父との再会を願っていた。



初刊＝新泉社（三葉マミコ名義）

刊行年＝1935年

書影＝偕成社版

併読のススメ 由利聖子の代表作である『チビ君物語』は、背が低いために「チビ君」というあだ名をつけられた少女・初子の物語。家族が満州に行ってしまったため、初子は母の奉公先にお手伝いを兼ねて預けられるが、その家の「利イ坊」こと利恵子（りえこ）はわがままで、様々な意地悪を

戦前の作品の中で、とびきりポップでユニークな少女小説として紹介したいのが『モダン小公女』だ。本作の読みどころは、主人公のサア坊が入学した自由学院での女学生ライフ。お茶目な少女たちの暮らしぶりが、同時代の社会風俗を反映しつつ、ユーモアたっぷりに活写されている。ユーモアは由利聖子の作品全般に通じる特徴ではあるが、とりわけ『モダン小公女』では弾けており、サア坊の一人称は「あたし」、彼女の友人となる執事の令嬢・千萬子（ちまご）は「ボク」を使うなど、女学生文化のやんちゃな一面が切り取られている。『モダン小公女』は雑誌初出時から松本かつぢがイラストを手掛け、そのキュートな絵柄は由利の作風にぴたりとはまっていた。イラストレーターの的確なセレクトという意味でも、本作を高く評価したい。

本作の初出は『少女画報』で、ミス・マミコ（三葉マミコ）名義で1934年に発表された。由利聖子というペンネームは、『少女の友』連載の『チビ君』初回から使われ始めた。『チビ君物語』が代表作として知られているが、個人的には『少女の友』主筆・内山基（うちやまもと）の編集方針が反映された知的な女学生向けの作風よりも、『少女画報』発表の軟派系女学生テイスト満載の作風の方が好み。上流の山の手から下町まで、同時代文化を反映した作風や機知に溢れたストーリーなど、今後の再評価が期待される作家の一人である。

されるのだった。利恵子の兄で中学生の「修三さま」は妹を諫め、チビ君を気遣ってくれる優しい人である。その後初子の家族は帰国してチビ君は家に戻り、女学校に通うようになる。強情で勝気な利恵子と健気なチビ君の関係も変化し、二人の間に友情も生まれていくが、利恵子の癪（いら）がたびたびトラブルを引き起こす。当時の少女小説では珍しく、「修三さま」というさわやかかつ等身大の異性がメインキャラクターとして登場するのも興味深い。本作は1934年から36年にかけて『少女の友』に連載されて人気を博し、のちに『続チビ君物語』も刊行された。

かわばたやすなり
川端康成

おとめ

みなと

『乙女の港』

お姉さま二人の間で揺れるエス小説の代表作

あらすじ 横浜のミッション・スクールに入学した三千子は、5年生の洋子から奥ゆかしい手紙を受け取った。教室に戻ると、4年生の克子からも手紙が届いている。女学校には上級生と下級生が一对一で親密に交わる「エス」と呼ばれる関係があり、三千子は洋子を選ぶが、克子は諦めずに二人の間に割って入ろうとした。裕福な牧場の娘で誰にでも優しいが、精神を病んだ母をもち、どこか陰りのある洋子。一方の克子は勝気で活発な性格で、三千子を独占しようとする。お姉さまを慕いながらも、三千子は洋子とは異なる魅力を持つ克子にも惹かれてしまうのだった。



初刊＝実業之日本社

刊行年＝1938年

書影＝実業之日本社文庫版（少女の友コレクション）

併読のススメ 文豪・川端康成は少女小説も手掛けており、戦前は『少女俱樂部』や『少女の友』、戦後は中原淳一が創刊した『ひまわり』などで活躍した。『少女の友』連載の『美しい旅』は、目が見えず耳も聞こえない6歳の花子が主人公の物語。聾盲教育にも言及した先駆

「エスっていうのはね、シスタア、姉妹の略よ。頭文字を使ってるの。上級生と下級生が仲よしになると、そう云って、騒がれるのよ」。1937年から38年にかけて『少女の友』に連載され、一大ブームを巻き起こした『乙女の港』。本作では上級生と下級生が親密な関係性を築く「エス」が描かれており、「エス」を広く知らしめた作品ともいわれている。引用箇所は、誰とだって仲よくしていいのでしょうと無邪気に言う三千子に対して、エスを説明するクラスメイトの言葉だ。

『乙女の港』はノーベル文学賞を受賞した文豪・川端康成による少女小説であるが、のちに川端の弟子である中里恒子が執筆し、川端が加筆・修正して発表したことが明らかとなった。本作に通底するリアリティのある女学生文化の描写は、横浜紅蘭女学校に通っていた中里自身の体験が反映されているのだろう。『少女の友』の専属画家として人気を博した中原淳なかはらしゅんいち一が『乙女の港』の挿絵を手掛けており、夢見るような瞳ひとみをもった独特のイラストも本作の人気を後押しした。人形のように可愛らしい三千子と、奥ゆかしく大人びた洋子、そしてライバル役で小悪魔的な魅力のあるボーイッシュな克子。個性が異なる三人の少女を中心に、女学生同士の友愛や嫉妬しと、そしてスクールライフを小説と挿絵で紡ぐ『乙女の港』は今もなお人気が高く、実業之日本社からは完本も発売された。

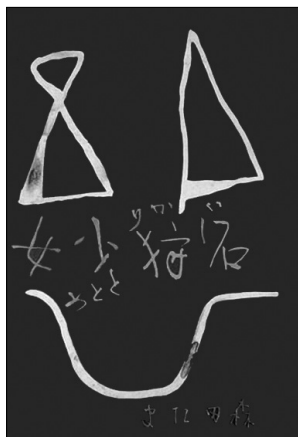
的な作品として近年注目を浴びている小説である。『ひまわり』連載の『万葉姉妹』は、生き別れて二度と会うはずのない姉妹が、そうとは知らずに同じ家で暮らし始める物語。資産家の娘として甘やかされて育った姉の安見子あみこと、田舎で育った健気な妹の夏実なつみを中心に、少女たちの細やかな心理を繊細に描いた。戦後に人気を博したバレエを物語の要素に取り入れたところにも、川端の少女文化への理解の深さがうかがえる。『歌劇学校』も『ひまわり』に連載された長編小説で、歌劇学校の生徒たちの日常がいきいきと描かれた作品。なお本作は、元宝塚歌劇団員だった川端の母の代作だといわれている。

もりた
森田たま

『石狩少女』

聡明な文学少女の多感な感情に迫った名作

あらすじ 女学校2年生の野村悠紀子は、利発で感受性の強い文学少女だった。悠紀子は女学校の入学試験の作文で、良妻賢母になろうと思ったことはなく、将来は学問で身を立てたいと書く。そんな彼女の才気を英語教師・土屋壮吉は認め、あなたは文学で身を立てられる人ですと応援してくれるのだった。悠紀子は雑誌『少女の國』に投稿しているが、そこで知り合った相手が女性を騙った男だと判明し、あらぬ疑いを受けてしまう。家族や同級生、周囲の男性に対する苛立ちや反発など、15歳から17歳に至るまでの少女の繊細かつ潔癖な自意識が、札幌の豊かな自然と共に綴られる。



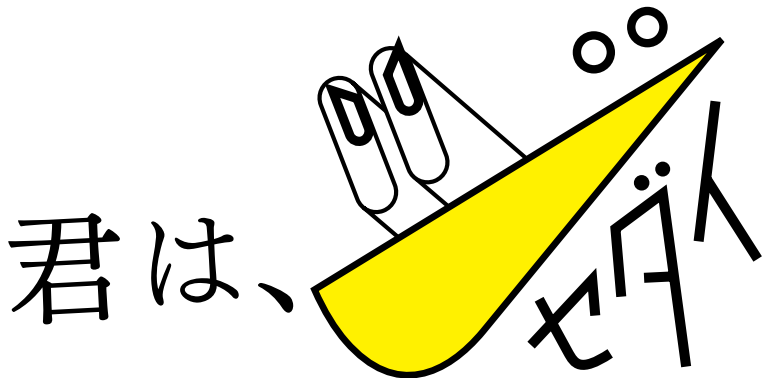
初刊＝実業之日本社
刊行年＝1940年

併読のススメ 連載を経ずに出版された少女小説としては、他に松田瓊子の作品が挙げられる。小説家・野村胡堂の次女である瓊子は、1937年に教材社から『七つの薔薇』を刊行するが、1940年に23歳の若さで夭折。生前に執筆された小説は死後夫や父の手によりまとめられて出

『石狩少女』は『もめん随筆』などで知られ、参議院議員も務めた森田たまの自伝的長編小説。森田は明治期に人気を博した博文館の雑誌『少女世界』の常連投稿者として知られ、当時の少女雑誌で実際にあった異性トラブルが作中に取り入れられているのが興味深い。帝大生の相澤一郎に「この子はいまにきつとすばらしいヴァンプになるぜ」と言われ、幼い日の思い出を俗悪な目でしか見れない男は恥を知るがよいと憤るなど、男性に対する怒りが作中でもたびたび描かれる。物語の最後では「あたし、決して結婚なんかしないわ。決して結婚しないわ」と涙を流すなど、良妻賢母への抵抗が描かれた少女小説としても特異な位置を占める。少女の鋭敏な感受性をベースに、甘やかな感傷や冷徹な内省を描いた本作は、文学少女ものの傑作であり、入手困難なのはいかにも惜しい。今後の復刊や再評価が期待される一作だ。

戦前の少女小説は雑誌に発表されるのが通例で、そのうえで一部作品が書籍化されていた。だが『石狩少女』は雑誌に連載されておらず、書き下ろしで出版されたややイレギュラーな作品だった。実業之日本社は雑誌『少女の友』の版元であり、村岡花子^{はなこ}は本誌の名物コーナーのブックレビューで『石狩少女』を取り上げて紹介している。良妻賢母を打ち出した講談社の『少女俱樂部』とは異なる個性を持つ、『少女の友』の系譜に属する少女小説である。

版された。戦後、なかはらじゅんいち中原淳一が創業したヒマワリ社から『紫苑の園』が刊行されて好評を博し、続編の『香澄』や『七つの蕾』なども続いて発売される。瓊子の作品のベースにはキリスト教への信仰があり、オルコットの『若草物語』やスピリの『ハイジ』などの影響を受けた、西洋の香りが漂う清純な作風が特徴だった。代表作である『紫苑の園』は、武蔵野郊外にある寄宿舎「紫苑の園」に入園した香澄^{かすみ}の物語で、寄宿生との友情や賑やかな生活、病気の母との永遠の別れと喪失感の克服などが描かれる。続編の『香澄』は、親友の兄に心を惹かれて愛を育む香澄のロマンスを中心に展開する。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!